

## ＜ラウンドテーブル報告4＞

### 「備えているべきだが欠けている素養を補う」に 留まらない初年次教育をどのように実践するか

【企画者】 柄内文彦(金沢工業大学)・西村秀雄(金沢工業大学)

【司会者】 柄内文彦(金沢工業大学)・西村秀雄(金沢工業大学)

【報告者】 柄内文彦(金沢工業大学)・塚越久美子(北海道工業大学)

徳田菊恵(名桜大学)・野田敏司(東海大学)

#### 1. 企画の趣旨

企画者らによる 2009 年度のラウンドテーブル「4年後の『出口』を見据えて教育課程全体と初年次教育をどのように構築し、実践するか」では、参加者から、「出口」の再確認に至るまでの課題を指摘する意見が出された。

寄せられた意見から窺えるのは、初年次教育に係わる人々は、初年次教育を大学教育の本質的な要素としてカリキュラムに有機的に組み込もうと様々に模索している、ということだ。企画者は、それらを以下の三点にまとめた。(1)理念と実践のバランスをどう取るか、(2)スキル教育と学びの本質を教えることのバランスをどう取るか、(3)教職員・大学経営のそれぞれの連携促進をどう図るか。

そこで、初年次教育に関わる人々のネットワーク形成の一助として、報告者らの実践を具体例として提供することを通して上述の課題に関する意見や情報を交換する「場」を形成すべく、本ラウンドテーブルを企画した。

(柄内・西村)

#### 2. 北海道工業大学

北海道工業大学では、2008年に改組・再編された新学部の完成年度を2011年に控え、カリキュラム改変への準備と合わせて、大学全体としての初年次教育の導入についても議論が始まったところである。本学は早くから「入口」と「出口」を意識したサポート体制を充実させてきたが、最近の学生の多様化、留年・中退者の増加は看過できず、「学びの姿勢」定

着のための教育の実施が必至な状況である。まずは新生の学力把握のため、2011年度からのプレースメントテスト(英・数・国)の実施が決定しているが、その他に、これから実践方法が議論される具体的な方策としては、(1)英語・数学・国語のリメディアル教育科目の全学必修での通年開講、(2)学びの姿勢を定着させるための「導入教育」科目の全学共通での開設、(3)初年次教育を専門に担当する教員組織の編成(非常勤の新規委嘱、学科専任教員から選抜)などが考えられている(学生サポートセンター長(副学長兼任)談)。

本学のように、「実質的に社会に貢献する技術者」を育成する大学にとっては、入学直後からの各専門学科のスキル教育も欠かせないものであるが、初年次教育科目を新設するには従来の開講科目を減らす必要性も出てくる。「学びの本質」の教育を、専門学科の独自性を出した教育とのバランスを取りながら、過密なカリキュラムにどう組み込んでいくか、これからの本格的な導入に向けての大きな課題となるであろう。(塚越)

#### 3. 名桜大学人間健康学部看護学科

今日、看護教育には、多様化したヘルスニーズに応えられる看護職の育成が求められている。一方、新卒看護師の約9%が1年間で退職するという早期離職問題があり、人間(力)教育が重要な課題となっている。彼(女)らの職場への適応困難によると思われるが、その要因として、「物事を自分で判断できない」、「主体的な行動ができない」、「対人関係が苦

手でチームで行う仕事が困難である」などが考えられる。そこで、名桜大学人間健康学部看護学科では「回避することなく場に踏みとどまる力」や「場や状況に自己を投入する力」としてコミットメント能力の育成が重要であると考えた。

本学科は2007年4月、保健・医療・福祉の実践を支える豊かな教養を身につけるとともに、看護実践に必要な、的確な判断力、問題解決能力と調整力、高い倫理観と技術を修得した看護師・保健師を養成することを掲げて開設された。本学科では学生のコミットメント能力の育成を目指し、「自己との対話」「他者との対話」「地域との対話」を掲げて、参画型看護教育を展開している。この教育理念の下、開設当初より少人数制のゼミワークやクラスワークを軸として全教員体制で初年次教育を行っている。

具体的には、「教養演習Ⅰ～Ⅳ」では、大学での「学び方」の基本的な技術やリベラルアーツの「知」を身につけ、「フレッシュマンセミナー」や「ふれあい看護実習」では、地域をフィールドとした協働探求力を学ぶ。これらの目的は、初年次から「看護」に特化するのではなく、大学生活や地域で生活する住民の「暮らし」に焦点を当てたプロジェクト学習を通して、自分自身の生活を振り返り、広い視野で保健・医療・福祉をとらえる豊かな教養を身につけることである。「語る力」「聞く力」「表現する力」が身につくなど一定の教育効果が得られてはいるが、教育課題を多くもつ学生も少なからず存在し、学年が上がるにつれて、身につく能力の差は拡大している。また、学科の開設当初はできていた教員によるきめ細かな指導のための時間の確保が、学外での看護実習指導の増加に伴って困難となっている。

初年次教育に関する課題には、大学としては教員数の適正配置がある。教員個人としては、評価基準の不明確さ、個々の教員の教育力の差に関連した指導方法の標準化の困難さ、が挙げられる。(徳田)

#### 4. 東海大学医学部

東海大学医学部の初年次教育の特色は大きく次の3点に集約される。(1)「懇話会」制度、

(2)「ME(Medical English: 医学英語)」教育、ならびに(3)「BLS(Basic Life Support: 一次救命措置)講習」会である。

「懇話会」は1年生5～6名を1ユニットとして構成され(計15懇話会)、「初年次少人数教育」のコアとして機能している。一つの懇話会には基礎系および臨床系教員が各1名ずつチューターとして配属される。例年4月初頭に開催の「新入生研修会」では、チューターは担当する懇話会学生らとともに学習し、かつ寝食をともにしながら親睦を深め合う。その後、1年間にわたり、当該学生らへの生活面でのケア、および学習面における「導入教育」の支援を担う。

本支援の核となるのが「ME」である。「人体の正常構造と機能」に関するテキスト「Human Biology」の原書輪読会を原則として週2回のペースで執り行う。将来、医師となるべき初年次学生に「人体」についての知識的基盤を構築させるとともに、チーム作業の尊さを体感させることを本旨としている。

一方、初等臨床教育としての実践面は「BLS講習」として結実する。一次救命措置法の習得によって生命倫理観の涵養を図り、東海大学医学部生としての自覚を醸成する。社会的要請の高まりにも沿い、基礎系・臨床系教員、ならびに教育・研究支援センターの技術職員をコアに、教職員一丸となって本職務を遂行している。

以上が、「良医の育成」を掲げる東海大学医学部の初年次教育への取り組みの一端である。(野田)

#### 5. おわりに: 「場」の形成

後日、本企画の趣旨に賛同した参加者に、アンケート結果、質問票の集計(報告者からの回答)、名簿を送付した。(枋内・西村)